

## 群列ボーリングによる邑知潟断層帯南縁部の地下地質

Detailed geological investigation by array boring prospecting in the southern margin of the Ohchigata tectonic lowland.

片川 秀基[1], 柴田 俊治[1], # 吉田 進[1], 浜田 昌明[1], 下川 浩一[2], 水野 清秀[2], 吾妻 崇[2]  
Hideki Katagawa[1], Toshiharu Shibata[1], # Susumu Yoshida[1], Masaaki Hamada[1], Koichi Shimokawa[2], Kiyohide Mizuno[2], Takashi Azuma[2]

[1] 北陸電力・土木部, [2] 産総研 活断層研究センター

[1] Civil Engineering Dept., Hokuriku Electric Power Co., [2] Active Fault Research Center, GSJ/AIST

北陸電力株式会社は、能登半島頸部に位置する邑知潟断層帯の地質構造等を明らかにすることを目的に、平成13年度から活断層研究センターと共同研究を実施している。平成14年度には、活断層研究センターがS波反射法地震探査と邑知平野での長尺ボーリングを、北陸電力株式会社が群列ボーリングを実施した。S波反射法地震探査は、昨年度のP波反射法地震探査（下川ほか、2002）で見出した平野/山地境界付近に伸びる低角度反射面について、浅所における位置精度の向上などを目的に実施した。群列ボーリングは平成14年度の探査測線に沿って、低角度反射面の地表付近における延長位置を含む約80m区間に11孔、全長320mを掘削した。ボーリングは孔径65mmで、中央内挿法を基本に展開した。掘削工法については別途発表するが、当社ならびに活断層研究センター実施分とも不撓乱でほぼ100%採取することに成功した。

群列ボーリングの結果、更新世中期前半の埴生累層と更新世中期～完新世の地層の累重を確認した。平野/山地境界の山側に沿う小丘は主に埴生累層からなる（片川ほか、2002）。背斜構造が発達し、調査範囲の埴生累層は背斜軸北西翼部にあたり平野側へ傾斜する。更新世中期～完新世の地層は埴生累層の平野側や同下底の地質不連続面に分布する。後述するクサビ状の崩壊性堆積物を除いて、小丘側の崩壊や地すべり、土石流などに由来する堆積層を含めて各層は水平ないし緩傾斜して分布する。また、崩壊や地すべり、土石流などに由来する堆積層を除けば各層は水平に、当社調査区域から370m平野側に位置する活断層研究センターのボーリング孔に連続する。

埴生累層下底の地質不連続面はS波反射法地震探査で見出した平野/山地境界付近に伸びる低角度反射面にあたる。この地質不連続面は岩相境界として見出され、明瞭な分離面は認められなかった。しかし、埴生累層はこの地質不連続面に沿って上方へ移動した産状を示し、前縁には同層に由来する崩壊物が堆積し、クサビ状の形状をなしている。このクサビ状の堆積層中には急傾斜を示す部分があり、また埴生累層がこの崩壊性堆積層のし上げる産状も想定される。これ以降、各層は埴生累層およびクサビ状崩壊性堆積層にアバットして堆積して堆積している可能性が高く、地質不連続面に沿う埴生累層の移動にともなう明瞭な変形は確認できなかった。クサビ状崩壊性堆積層の堆積と同層へ埴生累層がのし上げたのは、Aso-4を挟在する堆積層と43,400±330 YBPが得られた堆積層との間の時期である。

### 参考文献：

下川浩一・水野清秀・杉山雄一・片川秀基・柴田俊治（2002）石川県羽咋市付近における邑知潟断層帯の反射法地震探査。活断層・古地震，2。

片川秀基・柴田俊治・吉田進・浜田昌明・下川浩一・水野清秀（2002）石動山地（鹿島地塊）北西斜面のmass-movement。地球惑星科学合同大会講演予稿集（CD版），Y028-002。